

教員免許状更新講習 2017

「コミュニケーション・スキルアップの3日間！」

レポート

京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター 専任講師
岡崎大輔

コミュニケーションの機会を極端に避ける傾向が強くなっていく子どもたち。どうすればコミュニケーションの大切さを理解してもらい、コミュニケーションに向かう意欲を高めてもらえるのか。オリエンテーションで『伝える技術』の習得以前に、まずどうすれば『伝えたい』という気持ちを子ども達に持ってもらえるのか」という根源的な問いを共有することから本講習は始まった。コミュニケーションを、「みる・考える・話す・聴く」という4つのプロセスで捉えなおし、そのあり方と育て方を学ぶ3日間である。



オリエンテーションの後は「鏡をみながらさかさまの世界を歩く」。「自分自身の『みる』という行為が信じられなくなるシチュエーション」「本来の世界と信じている世界は、自分が勝手に経験を通して知っていた世界だとあらためて知った」という、これまでの経験が通じない未知の世界では、「頼りになるのはペアの人の言葉」であり、「視覚だけをたよらず、他人を信じる」ことで、他者が道標となってくれる。側で言葉をかけてくれる他者の存在を信頼すること、そこからコミュニケーションに向かう第一歩が生まれるのだ。

続いて行われた「目隠しをした人に絵を言葉で伝える」では、「『これぐらいの情報を伝えればきっと相手に伝わる→結果うまくいく』というよみは大きくはずれ」、「『相手がどんな情報を欲しているのか』という視点を忘れずに『見たことだけを伝えるのではなく、相手が何をわかっていないのか、何を知りたがっているのか』を考えながら話す、伝える必要がある」といった気づきをもたらした。これは教室でも同様。つい伝える技術を磨くことに意識が向きがちだが、子ども達に何が伝わっているのか、何を欲しがっているのか、何が必要かを意識し続けることの方が重要である。

午後のはじめに行われた「マンガ読解」は、マンガを2時間かけて“本気”で読み込むワークショップである。「まさにどう『みる』かの人による違いを感じました。語り合う中で相手を受け入れたり、自分の考えを変えていったりすることの良さ」、「多人数で一つのものを見ることで、いかに考えが深まっていくなかということ」を実感してくださった。

初日の最後は「今日のふりかえり」としてグループディスカッションを行い、学びを整理した。「相手を知るという事は『違う』という事を知る事」であり、違うからこそ自分にはない視点から新たな学びを得ることができる。コミュニケーションとは「『みる』という事と、逆に『見えない』という事」の間に存在するものであり、「自分にはみえていない面が必ずある」という実感こそが、他者とのコミュニケーションに向かわせる。初日は「他者とともにみる」ことによって起こった体験が、多くの気づきをもたらした。



2日目は「『みる』ことから始まる『発見』&『コミュニケーション』」と題したレクチャーから始まった。「作品だけでなく、人に対しても『わからないから興味がない』ではなく、『わからないから興味がわく』ことからコミュニケーションは広がっていく」と感じてくださったように、対話型鑑賞プログラムACOPがコミュニケーションを介した鑑賞教育にとどまらず、鑑賞を通したコミュニケーション教育であること、さらに「知らない人、わからないことを知りたい、聴き合える関係性の構築、伝えたいという気持ち」など、未知の問題に取り組む探究心、他者とのコミュニケーションに向かう意欲、すなわち、一つの決まった正解のない世界で、他者とともに生きる力を養うものであることを示す内容であった。

続く「聴く・応答する」は、決められたテーマで会話をするごくシンプルなワークショップ。しかし、「子どもに話を『ききなさい』という教師の立場で言う発言や授業の中で、いかにコミュニケーションが生まれず、一方的に伝え、子どもたちも『聴いて』いると思い込んでいた」ことに直面するような、鮮烈な体験となったようだ。「意識して『聴く』というコミュニケーションは、単に言葉という情報交換だけでなく、エネルギーの交換」であり、「決して受動的な行為ではなく、とても能動的な行為」である。「子ども達の話をしっかり最後まで聴く」ことによって「相手に安心感を与え、不安感を取り除く」ことになり、そこから「何かが変わり、それが新たな学びになる」ことを促すのだ。



これまでに行われたワークショップとレクチャーを踏まえ、「みる・考える・話す・聴く」能力を総動員して ACOP による作品鑑賞を行なった。グループのコミュニケーションに基づいて美術作品を読み解いていくプロセスからは「**“学ぶ”** こととは、独りで行うことではなく、他者に、自分に問いかけながら知識を共有し、解釈を掘り下げてゆく知の共働作業ともいえる」、「**「学びとは、自分の中で何かかわること」**。人の意見を聴いて、自分の意見が変わることも学びだと思いました」といった、「学び」とは何かを捉え直す根源的な気づきが生まれた。

初日同様、2 日目も締めくくりとしてディスカッションによる学びの整理を行なった。2 日間のプログラムを経て、「生徒の『学び』の意欲をかきたてるナビゲーターの役目こそ、教師の役目なんだと改めて気づくことができ」、「『私は子どもたちから学ばなくてはならない』。つまり、意志のある聴き手となって子どもとともに学びあう存在にならなくてはならない」など、教師としてのあり方に思いを巡らせてくださった。

3 日目の午前は、三重県総合博物館より大野照文館長をお招きして「**貝体新書-おとなが学ぶ二枚貝-**」を行なった。ハマグリ の貝殻をじっくり観察し、グループで対話しながら考えを深める対話型鑑賞の応用編といえる内容。「**ひとつのことにこんなに時間をかけて話し合うことは少ないので、“時間”がかかることは“むだ”ではなく、大きな成果への必要なステップだと思いました**」など、対話する意義を実感してくださった。午後からは古地図を題材としたワークショップも行い、対話型鑑賞の「みる・考える・話す・聴く」という 4 つのプロセスが、美術に限らず理科や社会にも応用可能であることを体験いただいた。



すべてのプログラムを終え「学校現場での実践を考える」として行ったふりかえりでは、得た学びをどう活かすか具体的な方法を一人ひとりに考えていただき、講習3日間を締めくくった。先生方はどんなお気持ちで学校に戻られるのか。最終日にいただいたコメントをいくつか紹介する。

「大学卒業以来、初めて『生徒』になることによって、学ぶことの楽しさを存分に味わうことのできた3日間であった」

「『学ぶ』ことの楽しさや発見をきれいに忘れ、『教える』ことに埋没していた自分に気づくことができた」

「生徒に学ぶ姿勢を求める前に、自らの学びを欲する姿を見せます！」

「3日間で、他の方の意見を聞く楽しさ、自分の考えを求められる喜び、一人ではたどり着かなかったであろう Truth（解釈）を見ることができました。これを教室の子ども達にも感じさせたいと強く思っています」

「子どもだけでなく、大人にだってもっと学びたい、と思わせる配慮が大事。この講習を受けて、やはり、本質から目を離さないことが大切だとあらためて感じました」

「『アクティブラーニング』、何だかよく分からない横文字に対して反発する気持ちが今まではあったのだが、この3日間で必要だと素直に感じられた。それは自分自身が様々なワークショップや講義を通じて、『納得』できたからだと思う」

指導要領の改訂により、大きく揺れている教育界。しかし、臆することはないだろう。教育に一つの正解はなく、私たちは他者とともに学び続けられる。コミュニケーションを閉ざさない限り、新たな発見が生まれ、そこから新たな可能性も開かれる。教師と生徒が意欲的にかかわり合い、ともに学び合える場がさらに広がることを期待し、レポートを終えたい。

ACOP
ART COMMUNICATION PROJECT